

この本は代数的位相幾何学に対して、できるだけ広い範囲の話題を取り上げつつ、取っつきやすい入門書となるべく心がけて書かれた。解説は古典的な立場に立つことを旨とし、狭い意味の代数的位相幾何学の枠からは一步もはみ出さない。そういう意味では、この本が30年や40年も前に出版されていたとしても不思議ではない。なぜなら目に見える形でここに書かれてあるものは少なくともそれくらい古いからである。しかしその過ぎ去った時間によって、最も重要な結論や道具が何であったのかが見えて来たのである。例えば、CW複体というものが代数的位相幾何学では最も自然な空間のクラスであることをこれまでの歴史が証明しているし、そこでこの本ではこの概念をこれまでのどの教科書よりもずっと強く強調する。この強調はまた、この主題の持つ代数的な側面より幾何的な側面を重視するという、この本の全般的傾向を顕わにする。代数的位相幾何学の幾何は整った素性の良いもので、これを軽んじてそこから得られる直感に背を向けてしまうのは、とても残念なことのように思われるのである。

... (以下略)